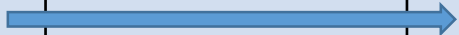


## ○鳥飼地域の洪水の想定

浸水深 \ 確率	1/30年	1/100年	1/200年	想定最大
安威川	○（浸水なし）	0.5m～3m		3m～5m
淀川	○（浸水なし）	○（浸水なし）	○（浸水なし）	3m～7.3m

## ○高台まちづくりの対象水深（考え方：案）

- ①安威川 計画規模（1/100）      ②安威川 想定最大浸水深（1/1000程度）  
 ③淀川 計画規模（1/200）      ④淀川 想定最大浸水深（1/1000）

ターゲット水深	評価
①安威川 計画規模（1/100） 浸水深 0.5m～3m	現時点での浸水リスクはあるが、大阪府および国のハード整備の進捗により、将来はなくなる。
②安威川 想定最大浸水（1/1000程度） 浸水深 3m～5m	安威川の計画規模以上の降雨があった場合を想定した最大水深。鳥飼地域（安威川以南）においては、淀川の想定最大浸水深に包含される。 想定最大とは現在までのデータから想定した1/1000の降雨確率。気候変動の影響により、その降雨発生確率は高くなる。
④淀川 想定最大浸水（1/1000） 浸水深 3m～7.3m	淀川の計画規模以上の降雨があった場合を想定した最大水深。 想定最大とは現在までのデータから想定した1/1000の降雨確率。気候変動の影響により、その降雨発生確率は高くなる。

# 水害リスクに対する摂津市のまちづくりの考え方(案)

## ①L1(計画規模):将来的になくなるリスク

摂津市においては、L1(計画規模)の水害は、府や国が計画的にハード対策を行い、将来的にはなくなるリスク

## ②L2(想定最大規模):気候変動の影響により発生しうる事象

L2の発生確率は低いですが、気候変動の影響によりL2まで至らなくても計画高水位※1を超える降雨が発生する可能性は高くなっている。計画高水位を超える洪水が発生した場合はパイピング現象※2などの要因から破堤する可能性が高くなる。

## ③浸水深は安威川L2より淀川L2の方が大きい

※1 河川整備の目標としている水位。この水位以下の水を安全に流すよう堤防は設計される。

※2 参考資料1参照

①、②、③から、水害リスクに対する摂津市のまちづくりの考え方は、淀川L2(想定最大規模)を意識した高台まちづくりを基本として検討を進めることが必要となる。



しかしながら、鳥飼地域全域を淀川L2を想定したまちづくり(全域の高台化)は不可能である。

水害リスク(発生確率)と使用目的を考慮し、  
最適解(淀川L2と安威川L2の対応の組み合わせ)を導き出す

# 高台まちづくりの対策（案）

## ① 全地盤上げ

高台とする場所の地盤を、ターゲット水深まで盛り上げる。

（効果）その上の構造物は浸水被害から解放される。

## ② 構造物対応 浸水防止(+地盤上げ)

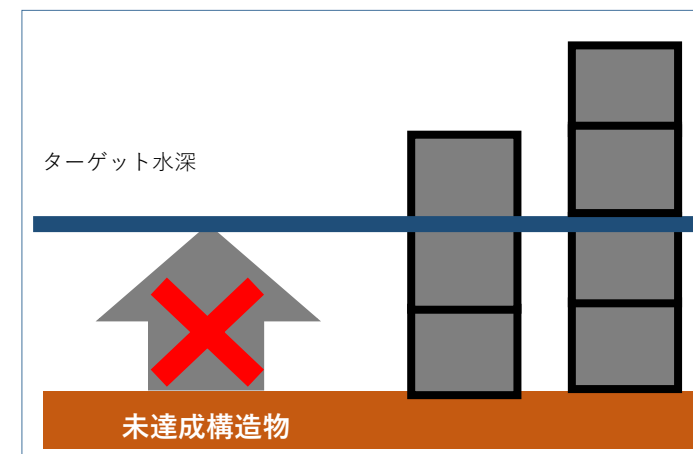
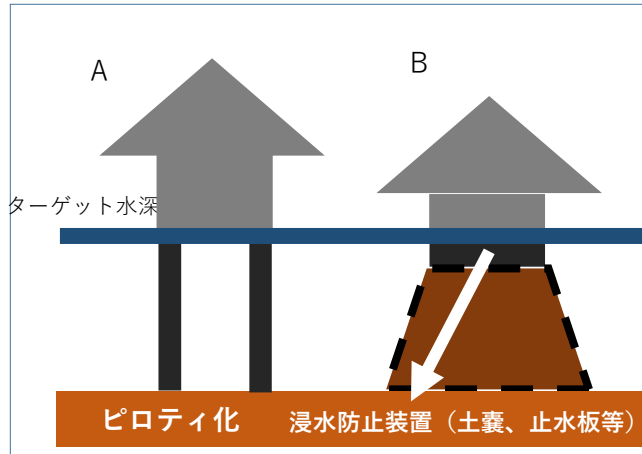
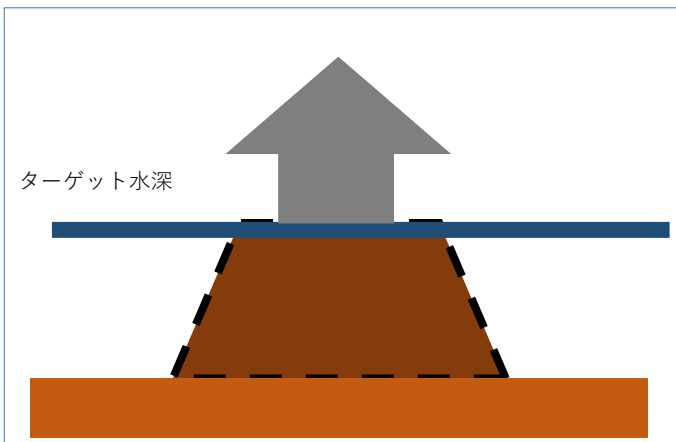
A ターゲット水深にあわせ建物をピロティ化する。  
B ターゲット水深まである程度地盤を上げ、その余は浸水防止装置を設置する。

（効果）少なくとも建物への浸水被害をなくせる。

## ③ 市民への協力

新しく家等を建設する場合、ターゲット水深より高い位置に空間を作るよう規制する。

（効果）垂直避難ができるようになる。



## ④ 目的（機能）別対策

ターゲット水深をその土地や建物の目的や機能で設定を変える。

例1：絶対に浸水させない重要な施設等

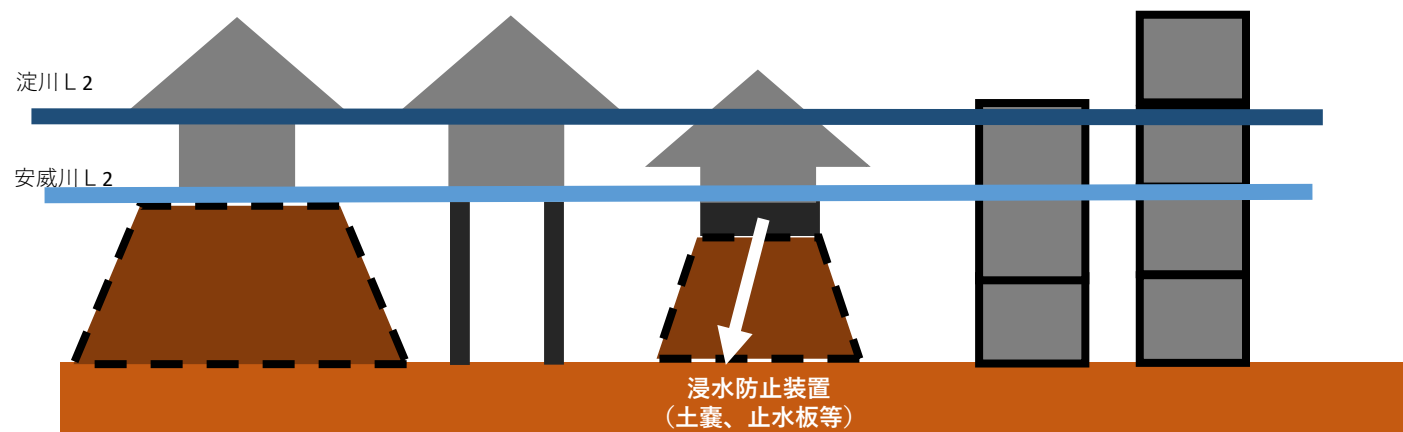
例2：少なくとも浸水被害を食い止め、避難空間を確保することを目的とする施設等

ターゲット水深 ⇒ 淀川L2（想定最大浸水深）

ターゲット水深 ⇒ 安威川L2（想定最大浸水深）

ただし、淀川L2が発生した場合についても検討する。

### 例2の検討例



※  
淀川L2の浸水深と  
安威川L2の浸水深の差が  
浸水防止装置（500mm）以下  
であれば、浸水防止装置等で  
対応可能